「総合討論」坪井秀人・白石恵理・小田龍哉編『日本研究をひらく：国際日本研究コンソーシアム記録集2018』晃洋書房　2019年3月20日　57-67頁

2—4 総合討論

張　競
横田雅弘
春名展生
伊東貴之
稲賀繁美
司会　榎本　渉

榎本　司会を担当いたします、国際日本文化研究センターの榎本渉です。

これまで三本、横田先生、春名先生、伊東先生からご報告をもらいました。横田先生からはご自身の属する学部の事例から「国際日本学」のあり方を考えたご報告をいただきました。春名先生からは歴史に限定された「日本事情」という留学生向けの授業科目が成立する過程を、実証的に検討してもらいました。伊東先生からは中国研究のこれま

での実績を踏まえて、中国あるいは台湾における日本研究や日本への関心について、いろいろな事例を紹介してもらいました。それぞれご自身の体験に即した貴重なお話をいただけたと思います。

皆さまがこれまでのお話を聴いて思われたことや、感じられたことなどがございましたら、まずその辺からお話をもらおうと思うのですが、どなたかいらっしゃいますでしょうか。では、張先生。

張　明治大学の張競と申します。三つのご発表とも大変おもしろくて、大いに勉強になりました。感想というのか、いくつか質問がありますので、それぞれの発表者にお聞きしたいと思います。

まず、横田先生のご報告を聴いて僕がまず思ったのは、「国際日本研究」は果たして専門領域なのか、それとも制度あるいは組織の一形態なのかということです。「国際日本学部」の教育現場にいる教員の一人として感じた問題ですが、これは意外と大事なことで、もし「国際日本研究」が専門分野であるならば、学部のあり方のモデルを構築することができて、これから国際日本研究に関連する学部なり研究機関をつくる際に、参考になるのではないかと思います。もしそれが学問領域でなく、単に組織というあり方ならば、事情がずいぶん違っていて、それぞれ違うような形でつくることができるのではないかと思います。

先ほど東京外大の林先生にもちょっとお話を伺ったのですが、東京外大は明大と違っていて、明大は先に学部ができて、それから大学院をつくったけれども、東京外大は先に大学院修士課程、それから博士課程を設立して、そのあと学部をつくるのですが、そのことに僕は個人的に大変興味を持ちました。

うちの学部は成立してからもう十年になりますが、十年前の大きな流れとしては、アメリカに倣ってリベラルアーツをつくればよいという考えがいわば共通認識になっていました。そうすると、「冠した名前はどれでもいいよ」というとちょっと言い過ぎかも

しれませんが、そのような見方が一部にありました。つまり、新しい専門領域の学部をつくるというよりも、リベラルアーツならば、というような前提で構想されるという一面もあったのですね。仮にこれが実は組織形態ではなくて専門分野ならば、もう少し真剣に考えないといけないのかなと思った次第です。これは国際日本文化研究や国際日本学部の将来にもかかわる問題で、個人的には大変興味を持っています。

それから、春名先生の話を聴いて僕が思ったのは、「日本事情」という科目を大学で開設する場合に、専門性をどのように担保するのかという問題です。我々の今までの常識だと、大学の学部レベルでの講義科目は、大体それぞれの専門領域と対応しています。例えば、経済なら経済、法学なら法学、あるいはもっと細かく分けて、刑法とか公法とか、そのように細分化された専門性に対応して、学部の授業が設計され、開講されているのです。

「日本事情」という科目が大学の日本語教育センターでつくられたのはよくわかります。つまり、語学予備校の授業という位置づけですから、それはよくわかります。ところが、春名先生のご報告によりますと、日本語科の中にも「日本事情」という授業科目があるように、大学の課程として開設されているのですね。そうすると、大学の科目としてその専門性の担保はどのように行われ

ているのか、ということが問題になるのではないかと思います。

最後に、伊東先生のご報告をお聴きして、僕の印象では留学生を対象とする場合と日本人の学生を対象とする場合、実際にダブル基準というものが目に見えない形であったのではないかと思います。もしかすると僕の誤解かもしれませんが、そういう印象を受けたのです。そのダブル基準というものが、果たしてあってよいのかどうか、そのことが気になっています。

これは実は二番目の問題ともかかわっているのですが、春名先生にご紹介いただいた「日本事情」という科目がなぜ学部の科目としてあるのかというと、僕の考えでは、やはり日本の外国語大学というスタイルと関係があるのではないかと思います。「外国語大学」はやや特殊な大学で、僕の知る限り、アメリカには「外国語大学」と冠した大学はないと思います。一番極端なのはハーバード大学で、ハーバード大学では実は外国語教育は学部とは別組織になっていまして、学部の中に外国語を教える先生はいないのです。教員の職名も違っていて、プリセプター（preceptor）であって、プロフェッサー（professor）ではないのです。外国人学生やその家族向けの英語教育も同じです。

ですから、そもそも大学とはどのような機関なのか、という問題があります。ヨーロッパのことはちょっとわからないけれど、アメリカと日本では違うのではないかと思います。そのためにこのようなちぐはぐなものができたり、あるいは特に理念もなく開講されたりするようなものがあるのではないかと思うのです。

伊東先生のお話に戻りますと、仮に無意識にダブル基準のようなものがあるならば、それでよいのかどうか。一方、仮に厳しくした場合にはどうなるのか、そのあたりのことに大変興味を持っています。必ずしも質問ではないのですが、もしお答えできる方がいれば、ぜひ教えていただきたいと思います。

榎本　本質的なところをご質問いただいたと思います。「国際日本研究」とは方法なのか目的なのかということに関し、前回のシンポジウムでも同様の議論が出ていた印象があります。今、三名の先生に個別に具体的な質問があったと思いますので、順番にお答え願えますでしょうか。

まず、横田先生から。

横田　答えというものはないのですが、非常に的確にご指摘をいただいたものと思います。先ほどは高山先生に登場していただいて、そして彼の考えをテーマに話を展開しました。一緒になって、専門分野としての「国際日本学」をどうつくるかを教授会の中でも何度もやりましたから、かなり本質的な話だったと思いますが、私の印象ではそれをずっと続けても結論がなかなか出なかった。

しかしながら、教育をずっと行っている中で少し、観点を変えて分析してみようということで、先ほどのような「越境」ということを通して、組織が大分違うのだと、その違う組織の中で何が生まれるのだろうかと考えてみました。ディシプリンを否定しているわけではなくて、しかしながら、従来の形で行っていてもなかなか新しいディシプリンが出てこなかった。それでは何かやり方を変えてみると、そこから生まれるかもしれないということを、まず認識の共有かな、違う見方もできるのだと。そうすると何か新しいものが生まれてこないだろうかという、一方では新しいディシプリンを誕生させようとする仕掛けにもなり得るかなという気持ちで話をしました。ですから、どちらなのかということはなかなか難しい。お答えできないです。

ただ、リベラルアーツなら名前は何でもよいではないかというようなこと、これもすごく大きな、確かにそういった議論もあったように思いますので、非常に明確にその点を指摘していただいて、また先生とご一緒させていただくので、今日はしかも私以外にも四人の方々が明治大学国際日本学部から来られているので、このシンポ

ジウムから持ち帰ったものをまた議論していくのを楽しみにしております。

春名　私が受けた質問というのは、日本事情の専門性というものをいかに担保するかということだったのですが、実はその点こそ、私自身にとっては最大のこの科目の難しさです。私は日本の政治について教えていますので、「日本事情」という名前だけれど、それの延長だと思ってくれというふうに言っています。

ただ、それなのに、「日本事情」という名前がこのまま存続してきたのは、おそらく東京外国語大学の中でいえば、留学生センターの中だからだと思います。これが学部に行ってしまうとどうなるかと言いますと、先ほどちょっと学部の話もしました。特設日本語学科、さらにそのあと日本語学科というのが外国語学部の中にできます。

そのときどうなったかと言いますと、「日本事情」というのは講座名なのです。ですから、先生たちの組織としての講座が「日本事情講座」なのですが、実際にそこで行われている授業とは何か。日本近代史だったり日本農業史だったり日本宗教史だったり、そのような科目立てになります。「日本事情」という科目は、名前としては残らなくなるということなのです。

けれども、逆に、今度は私のほうから聞きたいのですが、ほかの大学の学部で「日本事情」という科目を立てている場合にはどうなっているのかということに若干関心があります。東京外国語大学の場合ですと、学部の中の科目名としては消えている。もう少しスペシフィックな、学問分野を立てたような科目になったということをご紹介します。

伊東　すみません、ご質問に対してお答えしますが、少なくとも私自身は、何かダブルスタンダードのような基準を設けているつもりはございません。誤解というふうに申し上げるのはちょっと失礼かもしれませんけれども、では無意識においてはどうかと言われたら分かりませんが、そういうことがないように気をつけているつもりです。

あとは、私どもの専攻で言うと、別に留学生枠のようなものがあるわけではなくて、普通に同じ試験を行って、具体的に何年に何人どうなったかとは申せませんけれども、日本人の方が不合格である年は、中国人の方のほうが合格者が多いとか、そういうことは普通に起きております。

今、逆にほかの大学ではどうなのかをお伺いしたいのですが、私が院生のころは、大学にもよりますけれども、そういう留学生枠みたいなものがある大学がまだ結構あったと思いますね。ただし、その場合でもいわゆる専門性とか学力とか、そういった内容面ではなくて、日本語力として、当然ネイティブではないわけですから、多少遜色があっても少しそれを考慮するとか、そういうことが普通だったのではないかと、自分の大学院のときの印象ではそう思いますが、そのときの先生方がどうしていたかは、私は、教員ではなかったわけですから分かりません。けれども、今はそういった一種の差別というかカテゴライズみたいなことをしている大学は、むしろ少ないのではないかと思いますね。ただ、個々の先生方とか、場合によっては私も含めて、本当に内面まで突き詰めていってどうかというのは、何とも分からない部分もあります。一応それが一つのお答えでございます。

あと、先ほど少し誤解があったかもしれないのですが、私が申し上げようとしたのは、日本の特に近代以降とか現代の問題でしたら、現代の普通の日常の日本語ができるようになれば全く構わないのですけれども、要するに古典的な研究をしようとすると、これは日本人の場合も同様なのですが、だんだんそういうものを敬遠するというか忌避する傾向が強いので、ちょっと特殊な問題が起こってくるということなのですね。

そのときに、中国語と日本語あるいは漢文の問題などで、やや厄介なのは、皆さんも

日本人の学生を教えたり、日本人とつき合ったりして、よくわかると思うのですけれども、日本人の場合は中国語ができなくても、特に堅い文章ですと何となく意味が分かってしまいますよね。しかしながら、それではやはりだめだと思うのです。かつては日本で訓読というものを編み出しましたけれども、あれは要するにそういうネイティブの方から教育を受けることができない時代にそうしたわけで、もっとも、荻生徂徠のように長崎の通辞から少し指導を受けた人もいますけれども、あくまでも便法なわけですね。

ただ、日本人にとっては中国語の文法コードがわかるという意味で、訓読にも良い点があるとは思いますが、やはり今では、多くの大学で漢文訓読も教えますけれども、中国音で発音して読むというのが基本ですね。中国史でも当然ですが。それは中国の方が読むのと同じレベルで読まなくてはいけないというか、同じように一応体験する必要があるということかと思います。これも細かいことを言えば、多分中国語学の専門家などによっては、「漢とか宋とか古い時代の中国語は、今の中国語とは違う」と言う方もおられるので、本当に厳密にはならないですけれども、やはり現代中国人の方と同じようなつもりでテキストを読むということですね。

それで言うと、やはり江戸時代の人が書いた文章は、江戸時代の人と同じつもりで、我々、現代日本人もそうですが、読まなくてはいけないということになります。

ただ、多分中国の方から見ると、日本人の漢文というのは、ちょっと崩れた中国語というか、日本風に崩した漢文ですけれども、大体意味がわかると思うのですね。けれども、彼らが読んでいた読み方もある程度習得していただかないと、彼らの論理構造が理解できないとか、そういう難しさがあって、要するに中国研究のために日本に留学されている方は、別に訓読などを覚える必要はないのだけれども、日本研究ですと、場合によっては必要になる、そういうことを申し上げたいと思ったのです。

榎本　張先生、いかがですか。

張　一点、ご説明したいと思います。実は伊東先生のおっしゃったことは、私自身が抱えている問題でもあります。例えば、留学生のレポートを読んでいて、内容的には良いことが書かれていますが、「てにをは」など、文法的には問題が多いものがときどきあります。これを落とすのかというと、なかなか落とせない。では、高得点をつけるかというと、やはり不安があるのです。現場で感じたそのような問題をどうすればよいのか、ということが私の関心であって、別に先生のされていることをダブル基準と言っているわけではありません。そのことをご理解いただきたいと思います。

伊東　よく分かります。私も学部の学生を教えていましたし、非常勤でも教えたりしていますけれども、そういう問題がありますよね。今日お話ししたのは、一応研究者を目指す人ということなので、やや狭い範囲で申し上げましたが、確かにそれは大きな問題だと思いますね。私もどうすればよいのかという究極の解決法がよく分かりません。

榎本　どうもありがとうございます。

あと、もうお一方くらいご発言をいただいて、本日の討論を終わりにしたいと思うのですが、いかがでしょうか。今回の「「国際日本研究」と教育実践」というテーマについて、最後に一言ご発言いただける方が、どなたかいらっしゃればと思います。では、稲賀（繁美）先生。

稲賀　国際日本文化研究センターの稲賀と申します。先ほどの三点の質問にかかわることですが、今や教育といっても大学の学部レベルですら、もはや教員が何かの知識を学生に与えるという場所ではないという話が、今日も

ありました。

例えば、まとまった海外向きの「日本事情」といえば、バブル期に外務省が委託でビデオの百科事典を編ませたことがあります。ただ映像は十年も経たないうちに時代遅れになってしまう。とりわけ最新電子機器情報など、経年劣化の最たるもの。けれども外国――中国でもよいし、私の場合はスペインですけれども――の教室で、そうした往年の遺物を出発点に、現代日本について議論するというのは一つの「手」なのですね。その後の世界の歴史や日本の推移が見事に浮き彫りになります。そのことを、ふと思い出しました。

それから、先ほど、学術ディシプリンについての問題が出ました。もう今では時効かと思いますが、二〇〇〇年の歴史教科書問題があったときに、私は北京で「つくる会」の歴史教科書を使いました。当時中国の学生さんたちは、まだ実物を入手していなかったわけですが、あの政治・外交問題を起こした教科書を出発点に議論してみました。そうすると、教科書の善し悪しといった日本国内の議論を越えて、学生諸君の認識がその先にどんどん伸びていく。実際の教育の場は、まさに学生たちとどうつき合うかという現場にこそあるのであって、それを忘れて「何が正しい歴史教育か」などと議論をしても、空転に終わる。

最後に、張競さんのご指摘は大切なところです。文法は間違っているけれども、良いことが書かれてあるような答案をどうするか。そもそも、中国の論文作法と日本の論文作法は全く違うわけで、中国の留学生の方がいらっしゃると、「あなた、日本流で書くの？　結構だけど、中国へ戻って苦労するよ」といった忠告は、やはり最低限言わざるを得ない。逆に、中国で推奨される論法が日本では批判されかねない。そのうえで翻訳に関わる件ですが、彼らが日本語という「外国語」で書いてきたものを直してあげる。添削をして「赤字」の訂正をたくさん入れるわけですが、この朱書、「赤字」というのは、その学生にとっては将来に絶対「黒字」になる。だから赤字を黒字にするのが教育だ、というふうに思っています。

榎本　ありがとうございました。まだまだ議論を続けたいところですが、時間の都合もあり、総合討論はこれで締めさせていただきます。

（了）